

宇津保物語の文体と成立の論

—— ユソの用法による分析 ——

大野 晋

宇津保物語は、源氏物語に先行するつくり物語として文学史上独自の位置を保つ作品である。

この初期の物語がどのように構想されて成立したかという問題は注意をひく。近年大いに進んだ宇津保研究によれば、その内容は構想上、三部に分けられているようである。

第一部は俊蔭の巻に始まり、音楽・求婚・恋愛を話題として、一貫した主題による展開というよりは、貴族社会の生活の記述の中に種々の挿話が折り込まれた一種の寄せ集めのものといえる。それが、この物語の分量の上では、全体の五割近くを占めている。

第二部は「蔵開」に始まり、「国譲」へと展開する。ここでは事件は相互に緊密に結びついており、摂関時代

の政治的な人間関係が明確な意図をもって描かれていく。第三部「楼上」はそうした現実的な政治の世界を、觀念の上で超越して、「永遠」の問題を考えようとする。文章は具体的記述、感覚的描述に富むといわれている。

第一部の「藤原の君」の歌が、九七二年八月一日の、『かげろふの日記』に引用されているから、第一部はそのころまでに成立していただろう。第二部は『枕草子』の「物語は」の段に「うつほ。殿うつり、国ゆづりはにくし」とある。ここにいる「殿うつり」は、今の「蔵開」に当たるものであろう。第三部については、「内大臣という官職の扱いや風俗・行事の描写から、一条朝（九八六—一〇一一）初期まで降るかと考えられる」と、宇津保物語研究の専門家、野口元大氏は述べている。

宇津保物語はこのように、内容の上から第一部・第二部・第三部に分けられ、成立期についても、天祿（九七〇—九七三）の頃から、一条天皇の頃までであり、その間に順次成立し、流布したものと考えられる。

今日までの宇津保研究の結果としては、この物語は、一人の作者がはじめから一貫した意図を以て全部を執筆したものと認めがたいようである。少なくとも、第一部と、第二部・第三部との間には、構想上にも一つの区切りがある。

このように、一つの物語が多元的に成立していると思込まれるときには、その文体と構想上の区切れとの間に平行する現象の見られることがあり、その分析にあたっては、年代的に用法の大きな変化を経たコソが、有力な視点を提供する。

そこで私は、宇津保物語のコソを、「文中に使われるコソ」と「文末に使われるコソ」とに分け、それぞれの使用の上の特徴を検討した。「文中に使われるコソ」とは

をのれをば、まどはさんとこそおぼしけれ。

（蔵開上）

あはれ。旅人にこそあなれ。

いとおそろしきことをこそ聞きはべりつれ。

（俊隆）

（国譲下）
 のようなものである。このコソは会話文の中に圧倒的に多い。

「文末におけるコソ」とは次のようなものである。

「またさへ見え奉り給ふこそ。」（俊隆）

「しばしうち休みて、つとめてこそ。」

（蔵開中）

「皆人のうらやみ聞ゆることの、かくのみのし給ふこそ。」（国譲上）

これらはずべて会話に使われ、文の末尾にあつて、強調して話を終わる語法である。最善の写本といわれる前田家本によつてこの両者の使用度数を調べるに当たつては、第一部は「沖つ白波」まですべてを一括し、第二部以下は、巻ごとに分けて考察する。

「文中のコソ」として計数したのは、「体言こそ……」「……にこそ……」「……とこそ……」「……をこそ……」の四つの型式のコソの合計である。言語量とコソの例数は次の通りである。

	文中のコソ	文末のコソ
第一部	九二〇ページ	二九四
第二部	七四八ページ	二九〇
第三部	二四三ページ	七一
		二四九
		二二三

これらの使用率は、第一部の使用率を1と見て比較した数字をあげる。

文中のコソ 文末のコソ
 第一部 一・〇〇
 第二部 一・二二 一・〇〇
 第三部 〇・九二 三・一一

(底本は、宇津保物語研究会編『宇津保物語』
 本文と索引・笠間書院・一九七三年刊)

△文中のコソ▽

	第一部 沖つ白波まで	ページ	例数(比率)
	九二〇	二九四(一・〇〇)	
第二部 蔵開	上	一四〇	五五(一・二三)
	中	八二	三七(一・四一)
	下	九七	三五(一・一三)
	上	一三〇	五七(一・三三)
	中	一一三	三五(〇・八九)
	下	一七六	七一(一・二六)

第三部 楼	上	一一一	四一(一・一五)
	下	一三二	三〇(〇・七二)

△文末のコソ▽

	第一部 沖つ白波まで	ページ	例数(比率)
	九二〇	二八(一・〇〇)	
第二部 蔵開	上	一四〇	三〇(七・〇〇)
	中	八二	二九(二一・八〇)
	下	九七	四四(二五・〇〇)
	上	一三〇	六二(二五・九〇)
	中	一一三	三九(二〇・五〇)
	下	一七六	四五(八・六〇)
第三部 楼	上	一一一	一四(四・二〇)
	中	一一一	一四(四・二〇)
	下	一三二	九(二・三〇)

(比率は「沖つ白波」までの使用率と、それ以後の巻々の使用率の比。)

つまり、「文中のコソ」の使用率については、第一部と第二部・第三部との相違はわずかである。ということでは、「文中のコソ」の使用という視点からは、文体的に第一部と第二部・第三部にそれほどの相違はないということである。

しかし、「文末のコソ」の使用度数は、第二部は第一部の一〇倍強、第三部は第一部の三倍強に達する。これは明らかに、文体の相違が、第一部と、第二部・第三部との間に存在することを意味する。第二部・第三部の作者は、第一部の作者とは相違する表現上の好みを持っている。

これを、同一の作者が第一部と第二・三部との間で、文体的変化をもたせるために意図的に操作した文章技術であると見ることがむづかしいように思う。これは第一部の作者と、第二・三部の作者の文体意識の相違がはっきりと反映したものと見る方が妥当であると思う。

すでに述べたように、第一部と、第二部・第三部との間には、作品の構成上の差違があり、その両者の間の文末のコソの使用度数の顕著な相違は、その構想者の相違と相応じるものと考えられる。

なお、この作品は、第二部と第三部との間にも、主題の相違、発展が指摘されている。

それならば、第二部と第三部との間には、作者の相違があるというような推測を立てられるだろうか。コソの使い方だけから見れば、「文中のコソ」については、第二部は第三部より使用の割合がやや高い。しかし、それを顕著だということはできないだろう。

ところが、「文末のコソ」について第二部全体と、第三部全体を比較すると、第二部は第三部の三・五倍の使用の割合を持っている。これは顕著な相違と見られる数字である。

しかし、それを巻ごとにこまかく見ると、次のような事実がある。「蔵開」の上から中・下を経て、「国譲」の上に至るまでは、「文末のコソ」の使用率は、七・〇

↓一一・八↓一五・〇↓一五・九と増大して行く。ところが、「国譲」の上から中・下、「楼上」の上・下に至ると、一五・九↓一〇・五↓八・六↓四・二↓二三と減少して行く。

この数字だけを見ると、作者は「文末のコソ」を使った強調表現による会話を、第二部の発展に伴って、次第に多く使ったか、「国譲」上を境として、そのような表現を次第に使わなくなり、話の結末に至ったのではあるまいか。

そのように考えれば、むしろ第二部と第三部とは、同

じ作者が書きついで行ったもののようにも見えてくる。
もとより、コソ一つの使い方で全体を論じることは困難であるが、コソは、宇津保物語の文体、あるいはその成立を考察する上で、有力な一つの視点を提供するものといえるだろう。